

長野原町年金兼業農家

塩野 英介 氏

負け惜しみ、やせ我慢と言われようと

退職後、父のあとを受け継いで米作りを初めて20年になる。上手にはならないが、一族が一年間食べて多少ゆとりがある程度の収穫はある。それで充分だ。

まったくの素人だが、何とかなっているのは、子どものころから父に手伝わされてきたことが、今になって役に立っているからである。あの頃はいやでたまらなかった手伝いだったが、自分でやるようになったとたんに面白くなったのだから、何とも不思議ではある。

父が折々に話していたこと、黙々と作業をしていた姿を思い出しながら、見よう見まねでもみ種を蒔き苗を育て、代掻き、田植え、田の水回り、除草、そして稲刈り、脱穀と春から秋まで気の抜けない作業が続くが、収穫が済めば出来不出来に関係なくホッとして肩の荷が下りる。

ところで、農業は金がかかる。肥料、農薬、種、資材などの費用は、100%自家消費の我が家ではすべて持ち出して、なけなしの年金からこれらの費用を支出している。もちろん自分の労賃など1円もない。そんな状態で「農家」といえるのかと思うこともあるが、自分では胸を張って兼業農家だと思っている。年金との兼業で我が家の農業は成り立っているからである。

やめて米を買った方が楽ではないかとよく言われる。そうかもしれないと自分でも思うこともある。しかし、自分がやめたら田んぼや畑はどうなるか。たちまち荒れ果てていくことは目に見えている。偉そうなことを言わせてもらえば、農業を続けることで、俺は大切な農地を守っているのだ。ハッ場ダムと同じように洪水を防いでいるのだ。そしてなにより哲学のない農政のおかげで右下がり一方の、日本の食料自給率を土俵際で支えているのだ。

こんな負け惜しみともやせ我慢ともつかない屁理屈でカラ元気を出して、春になればまた痛む腰をさすりながら、足を引きづりながら田んぼに出ていくのだ。

やんば天明泥流ミュージアム

富田 孝彦 氏

縄文時代(約4000年前)の交易品

長野原町では縄文時代後期前葉(今から約4000年前)に独特な器形と文様を有した注口土器が作られていました。この土器は明治27年(1894)に茨城県稲敷郡東村(現稲敷市東町)の福田貝塚から出土した注口土器をもとに「福田類型」と名付けられています(写真)。

本類型の特徴は以下の通り。①張り出した底部、②体部は丸く下膨れでそのまま内傾しながら口縁部まで立ち上がるものを基本とするが、体部が大きく膨らみ口縁部は直立気味にやや外反しながら立ち上がるもの、体部が大きく横に膨らみ口縁部は大きく外反して体部との分立が明確なものもある、③把手が口縁部の下に付くものと口縁部上に突起をもち把手と口縁部が一体となるもの、④文様は長楕円区画の刺突文で構成され、渦巻文や隆線区画するものもある、⑤全体的に焼き上がりがよく、器面は薄く削り込み、丁寧に磨いて仕上げているため光沢がある。器面全体は炭を吸着させて黒い色調を呈する。

本類型は福田貝塚から発見されて100年以上経過していますが、どの遺跡からも出土するものではありません。一般的には他のタイプを主体とする遺跡がほとんどで、本類型は破片で混じる程度か全体を復元できる個体が出土しても極めて客体的です。それに対して、本町の遺跡では本類型を主体としており、現時点で8遺跡56点(破片も含む)の出土を確認しています。1軒の住居跡から6個体以上出土している事例もあり、特異な現象といえます。本類型を好んで作る名人がいたのでしょうか?先述した福田貝塚例も長野原町からもたらされたものかもしれません。



写真:稲敷郡東村福田貝塚例(重文:東京大学総合資料館蔵)



あさまびと

A S A M A - B I T O

地域の成り立ちから、地球の成り立ちを知る

SDGs x ASAMA

2024 春号

Vol.28

特集：浅間山北麓の歴史①～原始から古代～



やんば天明泥流ミュージアム

アンケートに答えると毎号5名様に
ハンドブック(非売品)が当たる!



Together Forever
アンケートはこちら



ジオパークから
のお知らせ

春のイベント情報!

4月末~5月上旬	浅間牧場周回遊歩道ジオツアー
GW日程未定	GWジオパークイベント

発行：浅間山ジオパーク推進協議会

Mt. Asama Geopark Promotion Council
制作担当：広報・観光委員会
〒377-1524 群馬県吾妻郡嬬恋村大字鎌原494-45
TEL/FAX：0279-82-5566
URL：www.mtasama.com
E-mail：info@mtasama2568.xsrv.jp
Facebook：www.facebook.com/asamageopark
Twitter：https://twitter.com/home

ガイドの受付しています

「浅間山北麓ジオパークガイドの会」の認定ガイドによる案内の受付をしております。ご希望の方は、左記、推進協議会事務局までお申し込みください。

[料金]*ガイド1名あたりの値段
平地：半日6,000円 1日12,000円(参加者11名以上はガイド2名)
軽登山：半日10,000円 1日15,000円(参加者8名以上ガイド2名)
登山：1日25,000円(参加者8名以上ガイド2名)

編集後記

2023年度も終わり、もう間もなく2024年度を迎えます。今年度は2回目の再認定審査があり、2度目の節目を迎えます。いままでやってきたことを整理し、落ち着いて審査を迎えたいと思います。

浅間山北麓の大地には太古からの興味深い歴史が眠っています。ハッ場ダム建設のために行われた土壌検査の折に、多くの土器等の遺物が発掘され、やんば天明泥流ミュージアムに分かりやすく展示されています。その太古から現在までの歴史を3回に分けて紐解いていきます。今回は、太古から縄文、弥生、古墳、飛鳥、奈良、平安時代の移り変わりを紹介致します。

History of Mt.Asama North Geopark①

原始～古代

縄文時代や古墳時代といった文字が残されていない時代の当時の様子は、発見された遺跡や遺物からしか分かりません。そういった物から様々なことを考える学問を考古学と言います。

人がいなかった時代の浅間山北麓ジオパーク

今から25万年前、孀恋村には大きな湖がありました。

この湖には、ムカシマンモスと呼ばれる全長2m程度のマンモスの祖先が生存していたといわれていますがナウマンゾウなのではとの意見もあります。

下の写真は孀恋湖成層から見つかった歯の化石です。



東西11.5km, 南北9kmにも及ぶ大きな湖が存在していたとされます。孀恋村から長野原町まで及ぶ湖には、ゴヨウマツやトウヒなどが立ち並び、上記の歯を持ったマンモスの仲間も闊歩していたのかもしれない。



縄文時代は1万3000年から1万年以上続いた時代。その名の通り地域色豊かな縄文土器が作られました。

我々の祖先である最古の猿人は318万年前に現在のエチオピアで生きていたことが確認されています。



弥生時代は約1000年続いたとされ、米や青銅などが朝鮮半島から伝わり、また階級社会も生まれました。

縄文時代から平安時代を時計で表すと、縄文時代がとっても長いことが分かるね！



縄文時代のブーム

縄文時代には、地方ごとに共通の土器の形・文様をつけられる流行がありました。紋様は、自分たちの文化を表現・共有する方法として、同じ文様を大切にしたいと考えられます。浅間山北麓ジオパークの地域では、近隣地域の特色を取り入れたような、文様を見ることができます。これから、様々な地域と交流していたのかもしれない。



やんば天明泥流ミュージアム

縄文人は耳飾りなど、装飾品も数多く作っていました。死者に対する副葬品だけでなく、日常的に身に付けていたなら、それだけゆとりがあったのかもしれない。



やんば天明泥流ミュージアム

自然や死に畏怖した

縄文人の思想を垣間見る

フクロウのようなものが掘ってあるね！何に使われたのかな



孀恋村で見つかった大小2つの黒色磨研注口土器は、県の指定重要文化財に指定されています。この2つは、幅と高さの比がほぼ1対1.4(√2)であり、また、大小の高さの比も、ほぼ1対1.4(√2)で、2セットで使用されたと考えられています。

<中期後半>



やんば天明泥流ミュージアム

古墳時代はおおよそ350年続きました。より権力者との差が生まれ、巨大な古墳が多々造られました。



古墳時代の後、飛鳥→奈良→平安と続き、法律ができたり現存している大仏や建造物も造られます。



ヒスイに何か模様を掘っているね。勾玉にはどんな意味があったんだろう？



やんば天明泥流ミュージアム



孀恋郷土資料館



実際の平安時代は？

弥生人の死生観は

どういったモノだったのか遺体を埋葬して白骨化させた後に骨を洗い、清め、再度壺や甕に納めて埋葬する再葬墓、壺や甕に直接遺体を納めて埋葬する土器棺墓の両方が見つっています。縄文時代よりも発見数が少なく、この地を離れた可能性もあります。



やんば天明泥流ミュージアム

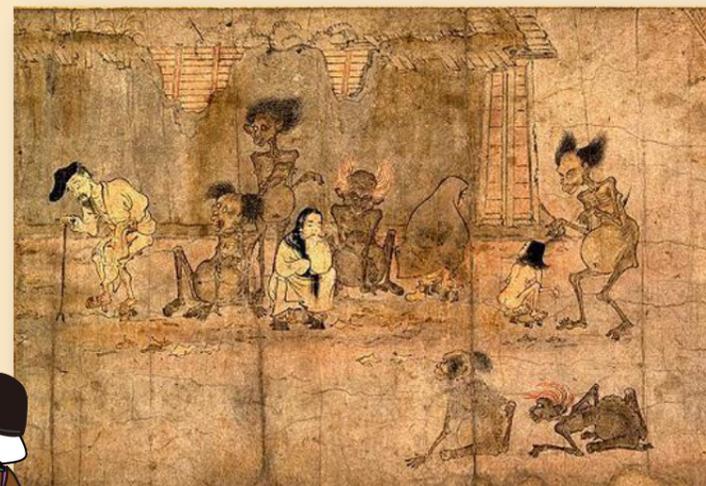
寄る辺を求めた大移動？

消えた古墳時代の人々

古墳時代の西あがつま地域では、古墳と確定できるものが存在せず、この地域でも古墳時代になると、弥生時代よりもさらに発見数が少なくなります。わずかに見つかった遺構からは、竪穴建物や、剣型の石製模造品などが発見されています。

今の礎を築いた時代の光と闇

平安時代はきらびやかな時代と思っている人もいるかもしれませんがそれは貴族などの一部の人のみで、農民などの位の低い人は縄文時代と変わらない竪穴住居に住んでおり、また、貴族の屋敷で仕事に就いていたが、風邪や病気などで働けなくなり、追い出されてしまい、下の図のような路頭に迷った人々がそのまま死んでしまい、路上に死骸が棄てられている様子も珍しくなかったのです。(餓鬼草紙)



東京国立博物館